

これまでに指摘されてこなかった尺度含意の 否定の例に関する考察

五十嵐海理

はじめに

「メタ言語的否定 (metalinguistic negation)」に関する研究 (Horn (1985), Burton-Roberts (1989), Chapman (1996), Carston (1998)) では、従来、音声や書記上の「メタ言語的否定」と会話の含意 (conversational implicature) や前提 (presupposition) の「メタ言語的否定」が同列に扱われてきた。しかし、五十嵐 (2000) で指摘したように、Levinson (2000) などは会話の含意や前提だけを否定する否定はいわゆる「メタ言語的否定」とは別に扱われるべきであると考ええる。

本稿では、第1節で、Levinson (2000) に従い、会話の含意のなかでもスケールの解釈を伴う量の含意 (尺度含意) を取り上げ、音声や書記上の「メタ言語的否定」とは違うということを確認する。第2節では、尺度含意を招く尺度述語 (scalar predicates) の「多義性」の問題を考える。一般的に多義的な尺度述語の意味は文脈によって決定されるとされるのであるが (Kempson (1980))、そういう考え方では説明しきれない例を観察し、解決の方向を模索する。

1. 「メタ言語的否定」の既知のデータと若干の新しいデータ⁽¹⁾

Horn (1985) が「メタ言語的否定」と名付けた現象は、Frege (1892) や Russell (1919) 以来の、もともと意味的前提に関する問題であり、かつては「外部否定 (external negation)」と呼ばれていた。古典的な例では、以下の(2)は典型的に外部否定の問題とされる⁽²⁾。

- (1) a. The king of France is bald.
 b. The king of France isn't bald.
 c. There is a king of France.
- (2) The king of France isn't bald — there is no king of France.
- (3) a. $\exists x[K(x) \& \forall y[K(y) \rightarrow (y=x)] \& \neg B(x)]$
 b. $\neg \exists x[K(x) \& \forall y[K(y) \rightarrow (y=x)] \& B(x)]$

ここで、(1a)は(1c)を意味的に含意しているとすると、その否定(1b)において not が(1a)に含まれる全ての意味的含意 (entailment) を否定するならば、(1c)も否定されるはずである。しかし、(1b)が真理値を持つためには(1c)が成り立つ必要がある。

これについて、Russell (1919) では、(2)の例が矛盾しないことから、次のように説明する。not でも否定されないはずの前提(1c)が(2)ではきちんと否定されることから、(1c)が(1b)では否定されず(2)では否定されるような曖昧な否定辞notを設定しなければならない。ところが、この前提を含意と考え、否定は常に(3b)のように全ての含意を否定する (=外部否定) とすれば、最初から(2)が矛盾しないことは予想される。(1b)も、否定が(3a)のように狭い作用域をもつ (=内部否定) と考えれば、(1c)の含意は狭い作用域の外で、否定されない。内部否定なら(2)は矛盾なので、(2)では否定が外部否定であると考ええる。

しかし、Strawson (1950) では、例(2)は矛盾しないが、the king of France という定名詞句には指示対象が存在しない (つまり(1c)は成り立たない) のだから、それを含む(1a)は真理値を決めることができない、真理値を持たないと考える。つまり、(1c)が成り立たないなら、(1a)も(1b)も主張するのに使われるなら、擬似用法 (pseudo-use) であって、主張が真であるか偽であるかという疑問はそもそも生じないのである。(2)について、「なんとなく変な感じ (squeamishness)」があるとStrawsonはいうが、これは真理値が(2)の最初の節について決まらないからである。(1c)は前提であり、意味的含意 (entailment) と区別される。

Horn (1985) は、(2)のような例を(4)~(7)のような例と同列に考え、このような否定の使い方を「メタ言語的否定」と呼んだ。

- (4) I didn't trap two MONGEENSE — I trapped two MONGOOSES.
 (5) He didn't call the [pólis] — he called the [polís].
 (6) Granny isn't feeling lousy, Johnny, she is badly indisposed.
 (7) I'm not his daughter — he's my father.

((4)~(7): Horn (1985))

いずれも先行発話で、それぞれの最初の節が発話されたと考えられる。たとえば(7)では、「きみが彼の娘さんだね」と言われたのに対して、

その発話を否定した上で「彼は私の父親なだけよ」といつている。「私が彼の娘」でも「彼が私の父親」でも言っていることは同じなのだから、否定する必要はないわけであるが、相手のものの言い方に反対しているのである（発話Uに対して、I object to Uということ）。

さらに、会話の含意（generalized conversational implicature (GCI)）を否定する例(8)も「メタ言語的否定」であるとされる。

- (8) John didn't eat three carrots — he ate four of them.
(Horn (1984))
- (9) Maggie isn't either patriotic or quixotic — she's both!
(Horn (1984))
- (10) SOME men aren't chauvinists — ALL men are chauvinists.
(Horn (1985))
- (11) I'm not happy, I'm ecstatic! (Horn (1985))
- (12) That car isn't old, it's antique! (Seuren (1990))

ここでは量の含意 (Q-based implicature) が外されていると考える。たとえば「ジョンは三本のにんじんを食べた」といえば、一般には食べたにんじんの数は最大3であるという含意が生じる。したがって「ジョンは三本のにんじんを食べなかった」といえば、食べなかったか、食べたとすれば二本以下のはずである。ところが(8)では、notによって否定されているのはこの「最大3」という含意のほうである。実際、四以上の数は全て三を含むので（五本のにんじんを食べたのなら、三本のにんじんを食べたはずである）、矛盾は起こらないわけであるが、このような含意だけを否定することができる否定は「メタ言語的否定」だけである。これらの例文に出てくる three と four、happy と ecstatic などは周知のようにHorn scaleとよばれる語用論的スケールを成している。Horn流の標準的な表記法では<S, W>のように、より「強い」要素が左に、より「弱い」要素が右にくるように書く。例えば<ecstatic, happy>となる。「強い」要素は「弱い」要素を意味的に含意する (entail) が、その逆は成り立たない。恍惚の状態の人は幸せな人だが、幸せであっても恍惚状態にない場合もある。さて、ここで一つだけ例を取り上げてこのスケールの解釈が否定によってどう変わるのかを、Levinson (2000) の表記法にしたがって試みる。

- (13) John ate three carrots.
 (14) [John ate at least three carrots] & [*John ate at most three carrots*]
 (15) John didn't eat three carrots.

(13)に関して、(14)の斜体になっている部分が量の含意 (Q-based implicature) である (つまりこれが尺度含意である)。(13)の否定は(15)だが、にんじんを三本食べなかったので、descriptive negation としての not であり、(14)の意味的含意は否定される (つまり「最低3本食べた」が否定の作用域の下にある)。すると尺度含意「最高三本食べた」も成り立たなくなる。従って、一本ないし二本のにんじんを食べたということになるはずである。Levinson (2000) では、この解釈を語用論的スケールから導く。(13)は例えば(16)のようなスケールを前提としている。さて、(15)は(13)の否定だが、Fauconnier (1975) 以来知られているように、not はスケールを反転させるので、NOT [*<one, two, three, four...>*] のようなスケールがあると考えられる。これはそれぞれ否定されているわけなので、(17)のように書くことが出来る。

- (16) *<...four, three, two, one>*
 (17) *<not-one, not-two, not-three>* (Levinson (2000))

ある要素はそれより右にある要素を全て意味的に含意する。従って、(16)では、にんじんを三本食べれば、二本や一本は必ず食べていて (意味的含意)、三本以上は食べていない (尺度含意)。また(17)では、にんじんを三本食べていなければ、四本や五本はもちろん食べていない (意味的含意) し、二本か一本食べている (尺度含意)、となる。従って、(16)のようなスケールを前提とする場合と、(17)のようなスケールを前提とする場合では、出てくる尺度含意が違い、ということになる。つまり、(13)と(15)は別な尺度含意が生じるのである。

ここで「メタ言語的否定」の例に戻る。このタイプの否定は先行する発話を繰り返す (echo) ものであり、その発話に対する言い返し (rejoinder) である。そこで(18A)言い返しとして(18B)を考えてみる。前段の議論から、(18B)の前半の否定文を(19)のように表示できるが、この“John ate at least three carrots”という部分は(18A)にすでに意味的に含意されており、これは(19)において否定されない。それに対

し、イタリックの部分は尺度含意であり、ここだけが否定される。従って、(18A)の量の含意のみが(18B)において否定されるのである。

(18) A : John ate three carrots.

B : John didn't eat three carrots — he ate four of them.

(Horn (1984))

(19) NOT {[John ate at least three carrots] & [John ate at most three carrots]}

否定されているのは、否定文(15)の意味的含意ではなく(つまり、「二本か一本はにんじんを食べた」)、肯定文(13) (= (18A)) の尺度含意(つまり、「四本以上は食べていない」)である。この先行発話の rejoinder として尺度含意を否定する「メタ言語的否定」は、必ずしも別の人物が発話したものである必要はない。次の例では最初の発話は元警察官のダイヤモンドが、ストランド殺人事件の参考人で女性写真家のショーターに、ストランドがきつとショーターの写真をすばらしいと思ったのだらうというところである。下線部はショーターがひとりで言っている。

(20) 'She must have admired your work.'

'I was reasonably competent,' she said. 'No — why be modest? — I'm bloody brilliant with a camera. When I showed her my book, she hired me.' (Peter Lovesey, *The Summons*.)

ここでは No という言葉が、「メタ言語的否定」と解釈される。なぜなら No は「私がかかなり腕が立つ」ということを否定して、腕が立たない、下手だ、と主張しているのではなく、「かなり腕が立つ (reasonably competent)」よりも尺度上高い位置にある「むっちゃうまい (bloody brilliant)」を主張するために、「かなり腕が立つ、ということ以上にカメラの扱いがうまいということはない」という尺度含意を否定していると考えることが出来るからである⁽³⁾。

こうしたスケールを前提とする発話では、尺度含意が先行する肯定文の発話に会話的に含意されている。これ否定することを「メタ言語的」とする必要はなく、ここから Carston (1998) が言う「メタ言語的否定

と同じ形をしているが、descriptive negationとして解釈されるもの」という考え方が出てくる。尺度含意を否定する否定が descriptive negation であれば、これは metalinguistic negation ではないとしなければならない。ここから、「メタ言語的否定」と一般に呼ばれている現象は二つに分けられ、量の含意や前提を否定する否定は「メタ言語的否定」と考える必要はないという議論が出てくる。実際、尺度の上のほうにある値を指すような表現は否定ばかりではない。

(21) She more than interests me, Leo. I'm crazy about her.

(八木(1987))

(21)は私の例ではないので、前後の文脈は分からないが、先行発話で Leo と呼ばれる人物が、「彼女にかなり興味を持っているようだね」といったのに対して、はっきりとそれ以上だといい、尺度上で interest よりも上の値にあたる「べた惚れ (be crazy about)」を持ち出しているようだ。ここでの more than をメタ言語的な operator であると見なす必要があるとも思えない。比較構文ではこのような表現は沢山ある。

(22) a. It's not only warm; it's hot.

b. The book is interesting, in fact it's absorbing.

c. John is happy; what's more, he's ecstatic. (八木(1987))

(23) John has three children, indeed he has four.

(Horn (1984))

同様な表現は音声や書記上の「メタ言語的否定」には存在しないと思われるので、ここでもやはり、尺度含意の否定は音声や書記上の「メタ言語的否定」とは違うものと考えなければならない。

2. 尺度述語と曖昧性 (ambiguity)

以前から、このような尺度含意を生み出す表現(尺度述語)は曖昧であると言われてきた。たとえば、先ほどの(18B)などは、「最低で3」と「最高で3」の二つの含意があったが、これは要するに three という語が曖昧だ (ambiguous) ということも出来る。そのような議論をもっとも明確に展開した Kempson (1980) をすこし振り返ってみたい。

それまでは、dog という語は「犬」と「オス犬」という二つの意味で

曖昧であり、dog は従って同音異義 (homonymy) であるとしてきた。しかし、Kempson (1980) では曖昧性の定義として(24)を採用するため、dog という語を含む文は曖昧であるとはいえない。

- (24) If one of the two interpretations associated with an ambiguous sentence entails the other, then the more general interpretation prevails and the sentence should be considered unambiguous. (Kempson (1980))

つまり、ある文が二つの解釈を持ち、一つの解釈が他の解釈を意味的に含意する場合、その「他の解釈」がその文の意味となり、文は曖昧ではないということになる。曖昧な文では、二つの解釈がお互いに他を意味的に含意しないのである。従って曖昧な文の二つの解釈は排他的選言 (exclusive disjunction) の形をしていなければならない。ところが、dog の場合は、「犬」でも「オス犬」でも、どちらも犬であることには変わらない。すると、オス犬に関して dog といった場合、「犬」と「オス犬」との両方が成り立ってしまい、排他的選言にはならない。「オス犬」を含む文は「犬」を含む文を意味的に含意するので、(24)の定義にあてはまる。従って、dog を含んだ文は曖昧であるとはいえない。つまり、dog は同音異義ではないということになる。Dog は一般的な「犬」という意味だとして語彙項目のなかに含まれることになる。しかし(25)のような文はそれでは説明できない。

- (25) That's not a dog, it's a bitch. (Kempson (1980))

(25)では dog が「犬」という意味だとすると、bitch「メス犬」も犬なので、犬でなくて犬だと主張していることになり、この文は矛盾するはずである。ところがこれは矛盾しない。すると「オス犬ではなくて、メス犬だ」と解釈しなければならない。それでは dog は「犬」からそれを意味的に含意する「オス犬」へと解釈をやりなおさなければならない。これは先ほどの議論と逆である。またこのようなパターンは多く見られる。

- (26) a. That's not a duck: it's a drake.
 b. That's not a cow: it's a bull.
 c. That's not a cow: it's a calf.

- d. That's not a line: it's a curve.
 e. That's not a rectangle: it's a square.

(Kempson (1980))

そこで Kempson (1980) は、体系的な規則として、(27)のようなことを考えた。

- (27) If a lexical item L1 has as its extension a set S1 which includes the set S2 which a second item L2 has as its extension, and S2 is the only lexically designated subset of the extension of L1 along any one dimension of contrast, then the lexical item L1 may be used to denote that subset of S1. (Kempson (1980))

ある語 L1 で表される集合 S1 に、別な語 L2 で表される部分集合 S2 がある場合、ある変数に関して、さらに別な語 L3 がさらに別の部分集合 S3 を表したりしないならば、L1 は S2 を除く S1 の部分集合 (つまり (S1 & (~S2))) をあらわすために使うことが出来るとした。つまり、L1 を多義だ (polysemous) と考えるのである。dog には bitch のほかに犬の性別に関して対立する語がないので、dog は犬の集合からメス犬の集合を除いた集合 (オス犬の集合) を指すために、使うことが出来る。このことから(28)のような場合も説明できる。

- (28) a. ?She isn't a woman: she's a grandmother.
 b. ?He didn't go to the station: he ran to the station.
 c. ?That isn't a hat: it's my best hat. (Kempson (1980))

たとえば(28a)では、女性は年齢に関して「おばあさん」という部分集合しか持たないわけではない (たとえば「少女」)。従って(27)と合わないもので、(28a)は矛盾になる。

しかし、これにはうまく行かない場合がある。Horn (1984) は次の三つの場合を挙げて、(27)に反論している。まず、(29)のように、(27)に完全にあっていない場合でも、(25)や(26)のようなパターンにならない場合がある。

- (29) a. ??That lion is not a lion, it's a lioness.
b. ??That rectangle isn't a rectangle, it's a square.
(Horn (1984b))

また、(30)のように、(27)でいうL₂が存在しないにもかかわらず、より一般的な呼称になった場合も存在する。

- (30) a. xerox → 1 Xeroxという会社名 2 コピーの一般的名称
b. kleenex → 1 Kleenex という商品名 2 ティッシュペーパー

さらに、(31)のように、(27)にありようにL₁とL₂があり、S₂はS₁の真部分集合であるにもかかわらず、S₁のS₂を除いた部分集合(S₁ & (~S₂))を、L₁が表わさない場合もある。

- (31) a. Does the baby have a temperature?
b. Does the baby have a fever?

というわけで、(27)にはいろいろと問題がある。しかし、例えばKoenig (1991) が述べている様に、(27)のようなことが必ずしも言えないわけではない。Koenig (1991) は数詞やその他尺度述語が特定の値が一つに決まる一義的なものと述べている。これは(32)の下線部は、たとえば(33)のような解釈にはならないことからわかる。また、数詞の場合、[at least n] というのが数詞nの一般的な意味として考えられてきた(Horn (1984, 1984b, 1985), Kempson (1986)) が、それが正しいとすれば、実際に at least が数詞nを修飾している場合、どう解釈すべきか分からなくなる、といったこともある。

- (32) a. CATHOLICS are not oppressed, ALL MINORITIES are oppressed.
b. DOGS are not cute, ALL ANIMALS are cute.
(Koenig (1991))
c. Mary does not have three children, she has four.
- (33) a. Catholics and other minorities
b. dogs and other animals
c. three or more children

従って、Koenig にとっては、数詞をはじめとする可算名詞は(33)のようなそれ以上のものをも含意するような意味を持つことは出来ない。われわれの議論と関係するのは、こうは言っても Koenig も、分配読み (distributed reading) を持つ場合は、(34)のような尺度含意を認めないわけには行かないので、(35)のような下位公準を設けなければならなかったということである。これは(27)と似ている。つまり “the truth set of A” が $(S1 \& (\sim S2))$ であり、“the truth set of B” が S1 ということになる。

- (34) a. Catholics are oppressed. → Only Catholics are oppressed.
 b. Dogs are cute. → Only dogs are cute.
 c. Mary has three children. → Mary has only three children (she doesn't have four)

(35) SUBMAXIM OF QUANTITY (Koenig (1991))

If the truth set of a sentence A is a proper subset of the truth set of a sentence B, A is more informative than B.

ここまでの議論から、尺度述語の多義性と言うことも、意味論のレベル (Kempson (1980)) か語用論のレベル (Horn (1984, etc.)), Koenig (1991) かの違いはあるにせよ、同じように真部分集合という概念を用い、その意味では実質上それほど大きな違いはないということがわかる。しかし、私はこれらの「部分集合」ということでは説明できない例を、以下で提出する。

例(36)のような文は、「メタ言語的否定」の議論の中では、これまで指摘されてこなかった。ここでは、尺度のうえでもっとも高いはずの the most important thing が否定され、それとは別な (しかしより強い) 表現がその後の correction clause に導入されている。

- (36) I do not think winning is the most important thing. I think winning is the only thing. 「勝つことが一番大切なことだとは思わない。勝つことが全てだと思っている。」 (Bill Veeck の言葉: 『やさしいビジネス英語』2000年6月号から引用)

しかし、これが例えば(37)のようなスケールを持っていて、the most important thing といえは the only thing というほど重要ではない、というような尺度含意が生じるとは考えられない。重要性という尺度でもっとも高いはずの the most important thing に、それより重要なものはないはずである。あるはずのないものを持ってきて、それほど重要ではないなどということは出来ない。

(37) <the only thing, the most important thing>

ここで面白いのは、そうとはいえ、この Veeck という野球の監督は別に勝つことがもっとも重要でないといっているわけでは全くないということである。つまり、前の「三本のにんじん」の例と全く同様、先行する表現が後続する表現に意味的に含意されているのはまちがいないのである。(18B)について、(38a)は(38b)に意味的に含意される。同じことが(39a, b)についてもいえるのである。

(38) a. John ate three carrots.

b. John ate four carrots.

(39) a. Winning is the most important thing.

b. Winning is the only thing.

前段での議論とも合わせて、一方が他方を含意することは、両方が同じ尺度上になければならないということではないことがわかる。

このような例が特殊なものでないことを、また推理小説から同様の例を引くことで示そう。文脈を明らかにするために、少々長くなる。

(40) They say when one door shuts, another opens.

In Albany Prison, when one door opens, another shuts.
A frustrating problem.

When a judge tells a convicted man that life in his case should mean the rest of his natural span, and when he is repeatedly denied leave to appeal, that man's mind may turn to other ways of shortening the sentence. ...

They tell the new arrivals in Albany that they don't have maximum security. It is ultimate security. All the gates

and doors are linked to a computer housed in a control room
bristling with television monitors. Approach a door anywhere
in Albany and you are up there on the screen. ...

(Peter Lovesey, *The Summons*.)

ワイト島にあり、イギリスのアルカトラズと言われるというオールバニー
刑務所は、「最高の警備体制 (maximum security)」ではなく、「究
極の警備体制 (ultimate security)」であるという。これも、(36)と同
じように、これ以上ないのが「最高の警備体制」なのだから、そうでな
ければ (つまり not があるので)、警備体制の尺度の中では「最高の」
より下の警備なのかと思うが、じつはそうではなく、それ以上の警備体
制だと主張しているのである。すると(41b)は(41a)を意味的に含意す
るということになる。従って、ultimate security は尺度上にはないの
に、尺度含意の否定と同じように機能しているということになる。

(41) a. They have maximum security.

b. They have ultimate security.

(40)で下線部に後続するコンピュータ制御のドアや扉の話は(41b)をサ
ポートしている。

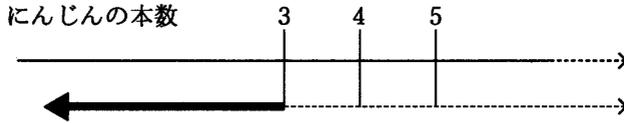
(36)や(40)はどう見ても語の音声や書記上の「メタ言語的否定」とは
考えられない。従って、(36)や(40)の例が問題になるのは、スケールを
前提とした量の含意である尺度含意は、スケール上にそれ以上の値があ
るときのみ生じるはずだからである。1節で(9)や(18B)について議論
したことを思い出せば、にんじんを三本食べたということは、一本や二
本は食べていることを意味的に含意し、四本以上は食べていないことを
尺度含意として持つということであった。さて、(36)の場合は、勝つこ
とが最も重要なことなら、勝つことが(単に)重要であることを意味的
に含意するが、最も重要なこと以上に重要なことはないので、そこに尺
度含意が生じる理由はない。(40)も同様である。尺度含意が生じないな
ら、それを否定することも出来ないはずである。

尺度含意を生み出す述語(数詞など)は多義的であり、意味のレベル
で二つの意味があるという先の議論は、あまり役に立ちそうにない。
(42)にあるように、「最も重要なこと」や、「最高の警備体制」はそれぞ
れの尺度上で一つの決まった値を示すのであるから。

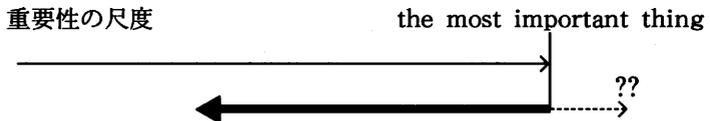
- (42) a. three carrots: 'at least three...' 'at most/exactly three...'
 b. the most important thing: 'at least the most important...' 'at most/exactly the most important...'
 c. maximum security: 'at least maximum...' 'at most/exactly maximum...'

(42b)と(42c)のような多義性は生じない。だから、これらの表現は尺度上で決まった値をとるので at least や at most/exactly などの修飾は受けないというべきだろう。従って、これらは多義的ではないのであり、一つの意味しか持たない。ここまでのことを図式的に表してみると、(43)のようなものになる。

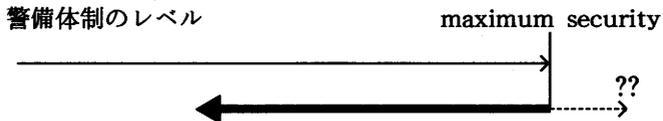
- (43) a. John ate three carrots.



- b. Winning is the most important thing.



- c. They have maximum security.



(43)で数直線上の一点から出ている太い矢印は意味的含意であり、ここが上記(42)の at least 読みに対応する。(43)で、同じ一点から出ている

破線の矢印は (Horn流にいえば) 尺度含意で否定される部分である。(42)の *at most/exactly* 読みに対応する。(43b, c)についていえば、尺度含意は尺度がないところから出るはずはない。??がついているのはそのためである。これはまた、Koenig (1991) の提案している *submaxim of quantity* でも説明できない。尺度含意が出てこないはずなのであるから、当然である。

ここではとりあえずの解決として、*only* や *ultimate* など、「これ以外にない」という含意を最初から持っている表現が *correction clause* に現れることに注目してみよう。そして、たとえば(44)のようなことが一般に成り立つとしてみよう。

- (44) [notA, B] という「メタ言語的否定」のパタンにおいて、Bが排他的意味を持つ場合は、Aがそれ自体、尺度の到達点であっても構わない。

これだと例えば絶対形容詞と呼ばれる一群の形容詞はすべて(36)や(40)のようなパタンを取りうるはずであるが、例えばBが *favorite* であった場合、同じようにうまくいくとは思えない。This is not the book I like best, it's my favorite book という文はどう見ても矛盾としか感じられないからである。従って、(44)は修正が必要であり、*favorite* のような例を排除するために、(45)のようにとりあえず言い換えてみる必要があるだろう。

- (45) [notA, B] という「メタ言語的否定」のパタンにおいて、Bが排他的意味を持ち、BがAを一方向的に意味的に含意する (*unilaterally entail*) 場合は、Aがそれ自体、尺度の到達点であっても構わない。

いまのところ、これ以上の解決法は思いつかない。

これからの調査としては、(45)がより一般的に言われるのかどうかと、(45)のようなことが正しかった場合は、それがその他の「メタ言語的否定」の例とどういう関係にあるのかということが考えられる。

註

- (1) この節の説明は五十嵐 (2000) と一部重複している。また、長い例文の場合は、問題の個所を下線でしめしてある。
- (2) The king of France という句は Frege や Russell や Strawson が論文を書いた時点ではもちろん、西暦2000年現在でも指示対象を持たない。
- (3) これまで指摘されたことはないが、(i) のような例も尺度含意の否定といえると思われる。最初の発話は若い婦人刑事で、次の発話は主人公のダイヤモンドという元刑事である。音楽プロデューサーの Jake Pinkerton が、Britt Strand という女性記者が起こした「問題」をもみ消してやったという疑惑について、この二人は調べているところである。

(i) 'So you're willing to gamble that Jake Pinkerton is the fellow who helped Britt over this problem, whatever it was?'

"Gamble - no." said he. 'It's a mathematical certainty. We know this person was a friend, male, lives locally, was in a position to help and knew Britt a couple of years before the murder. How many points of similarity is that?'

(Peter Lovesey, *The Summons*.)

ここでは gamble という先行発話の一部が繰り返され、それに対して no という否定がついている。その後には、a mathematical certainty が来ている。Gamble は、例えば You may gamble on it (それに賭けてもいい、つまり確実だ、という意味) のような表現にも見える様に、ある程度の高い確率をいうが、a mathematical certainty は絶対確かだといっているわけであるから、(i) は gamble 「確実だ」なんてもんじゃなくて、a mathematical certainty 「絶対にそうだ」と主張している。従って、これも尺度含意の否定と考えることが出来るだろう。

参考文献

- Burton-Roberts, N. (1989) 'On Horn's dilemma: presupposition and negation.' *Journal of Linguistics* 25, 95-125.
- Carston, R. (1998) 'Negation, "presupposition" and the semantics/pragmatics distinction.' *Journal of Linguistics* 34, 309-350.
- Fauconnier, G. (1975) 'Polarity and the scale principle.' *CLS* 11, 188-199.
- Frege, G. (1892) 'On sense and reference.' Reprinted in Moore (1993).
- Grice, P. (1967) 'Logic and conversation.' Reprinted in his *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, 1989.
- Horn, L. (1984) 'Toward a new taxonomy for pragmatic inference:

- Q-based and R-based implicature.' *GURT* '84, 11-42.
- Horn, L. (1984b) 'Ambiguity, negation, and the London School of Parsimony.' *NELS* 14, 108-131.
- Horn, L. (1985) 'Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity.' *Language* 61, 121-174.
- 五十嵐海理. (2000) 『メタ言語的否定』の新分類」六甲英語学研究 第3号, 1-14.
- Kempson, R. (1980) 'Ambiguity and word meaning.' In Greenbaum, S., G. Leech, and J. Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*, 7-16. Longman.
- Kempson, R. (1986) 'Ambiguity and the semantics-pragmatics distinction.' In Travis, C. (ed.) *Meaning and Interpretation*, 77-103. Blackwell.
- Koenig, J.-P. (1991) 'Scalar predicates and negation.' *CLS* 27, *Parasession on Negation*, 140-155.
- Levinson, S. (2000) *Presumptive Meaning*. MIT Press.
- Moore, A. (ed.) (1993) *Meaning and Reference*. Oxford University Press.
- Russell, B. (1919) 'Descriptions.' Reprinted in Moore (1993).
- Seuren, P. A. M. (1990) 'Burton-Roberts on presupposition and negation.' *Journal of Linguistics* 26, 425-453.
- Strawson, P. (1950) 'On referring.' Reprinted in Moore (1993).
- 八木孝夫. (1987) 『程度表現と比較構造』大修館.